

F-1 インドネシア民族の出自

563. マレー系民族の拡がり

《人種》、《民族》、《国民》という言葉がある。日本の場合は一部の例外を除き常に『日本人』であるが、外国ではこのような簡単なものではない。民族、人種、国民は各々別の概念であり、人種(race)とは[身体的]なもの、民族(ethnicgroup)とは[文化的]なもの、国民(nationality)とは[政治的]なもの、というのが一般的な通念である。本書では他に種族・部族という用語も民族の細分化概念として適当に使用している。

かつて人種区分に白色・黄色・黒色以外に褐色人種という区分があり、マレー系のインドネシア人は褐色人種とされたが、蒙古斑など黄色人種と共有することから今日では褐色人種区分説は影を潜めている。黄色人種もモンゴロイドという呼び方が普及している。

マレー系人種は南方モンゴロイドに分類される。中国人など北方モンゴロイドの顔は平面的で目は一重瞼の切れ長であるのに対して南方モンゴロイドの皮膚は黒く目鼻たちは立体的で瞳は大きい。今日のインドネシア人の先祖はアジア大陸から移住したモンゴロイドであり、猿人である化石人類のジャワ原人(→138)とは関係がない。

民族の区分である言語の分類においてインドネシア人はオーストロネシア(アウストロネシア)語群¹に属している。オーストロネシア語群は南島語族、マラヨ・ポリネシア語族ともいわれる。オーストロネシア語族の下位分類は(西部語派)と(東部語派)に大別され、西部語派は①台湾諸語、②西部インドネシア諸語、③東部インドネシア諸語に区分される。②にはインドネシアのほとんどの民族とフィリピン、マレーシア、マダガスカルを含む。インドネシア国内の②と③の境界はスンバワ島(→214)を二分し、スラウェシ島の東側を通る。

インドネシア人の主要言語はジャワ語、スンダ語、マレー語などであるが、これらは各々別の言語であって方言の相違ではない。

オーストロネシア語群の中では西はマダガスカル島から東は南米のチリ国に属するイースター島、北は台湾の高砂族、東北はハワイ諸島、南はニュージーランドのマオリ族までその面の拡がり是非常に大きい。何れにしる、オーストロネシア語群、俗に言えばマレー系民族のインド洋と太平洋の両方にまたがる拡がりには驚異的である。その中でもインドネシア人はマレー系民族の中核に位置している。しかし同じ東南アジアでもすぐ近くのタイやミャンマー(ビルマ)とは別の言語群になる。

マゼランは世界一周の航海に出かける際にスマトラ島の奴隷(多分マレー人)を従者として航海に伴い、フィリピンに着いた際にスマトラ人の単語のいくつかを住民が理解できることでアジアに到着したことを確信した。

¹ オーストロネシア語群が広範囲である。これはあたかも日本語がウラル・アルタイ語群に分類されるようなものである。ウラル・アルタイ語群にはハンガリ語とかフィン語まで含む。

564. 大陸からの移住

オーストロネシア語族の故郷は中国の南部と考えられている。タイ、ベトナム、ビルマ族などの民族は中国から押し出されてインドシナ半島に定住した。同様にインドネシア人の祖先のオーストロネシア語族も北から漢民族(中国人)の圧力を受けてメコン河、メナム河、イラワジ河に沿って南に移動し、ついには海を越えて島々に散らばって居住したものと見られていた。

しかし最近の学説では語学的には台湾の高砂族の言語が最も古いオーストロネシア語になるらしい。すなわちアジア(中国)大陸から台湾に移動した民族集団がオーストロネシア語族の先祖である。約 4500 年前に台湾からフィリピンに移り、そこから東西南北に拡散した、という説が有力になっている。

この中で南の島々に移住したのが現在のインドネシア人である、マレー系民族が一気に南方の島嶼部へ大移動した時期は数千年前でそれほど古い昔ではない。移住時期の早いグループがプロト・マレー人(次項)であり、遅いグループが新マレー人である。

世界史上の“民族大移動”というと教科書ではヨーロッパ大陸のことしか記載されていないが、東南アジアでも同じような民族大移動があった。以後、東南アジアではせいぜい近代の華僑の移動くらいでインドネシア民族の定着時のような規模の大きい移動はない。

ベトナム・カンボジアにかけて居住するチャム人はかつてのチャンパ王国²の後裔である。大陸部ではチャム人がオーストロネシア語族に属する。

编者註

ジャワ語の三種類(Kromo Inggil, Kromo, Ngoko)、インドネシア語、アチェ語、チャム語、タガログ語の基本 400 語彙を比較した結果は次の通りであった。

	Aceh	Cham	Tagalog	Ngoko	Kromo	K. Inggil
Indonesian	90	55	47	75	69	48
Aceh		63	32	41	32	20
Cham			36	33	24	15
Tagalog				32	21	15
Ngoko					123	85
Kromo						136

インドネシア民族のほとんどはオーストロネシア語族であり、西インドネシア語群と東インドネシア語族に大別される。アロル島(→223)、ティモール島(→221)、ハルマヘラ島(→230)には別群の言語の民族が散在している。ニューギニア島の沿岸部はオーストロネシア語族の言葉であるが、内陸部は別系統の言語である。

ところでマダガスカル島はアフリカのインド洋沖に位置する島である。島といってもグリーンランド島、ニューギニア島、ボルネオ(カリマンタン)島に次ぐ世界第 4 位の大きさである。アフリカからはモザンビーク海峡を隔てて 400km の距離であるが、人々の顔立ち、言葉、文化には 8000km 離れたインドネシア的要素が見られる。

人種的にもモンゴロイドの特徴が見られ、アフリカ大陸の黒人とは異なる。文化的にもアジアと同種の稲を栽培しており、高床式(→792)の米倉、穂摘み(→592)などインドネシアとよく似た稲作民族の文化を維持して

² インドシナ半島に 17 世紀まで存続したチャム人の王国があり、中継貿易を発展させた。インド文化の王国である。北から中国文化のベトナムの南進によって滅びた。現在はチャム人はベトナムからカンボジアに 16 万人ほどが少数民族として漁業などに従事している。ベトナムのニャチャンのポーナガル寺院はチャンパ王国の遺跡である。

いる。

言語的にもオーストロネシア語群の中でインドネシアとマダガスカル島の言語は近い関係にあり、マダガスカル語は西インドネシア語群に属する。

マダガスカル島は当初はアラブ、後にはヨーロッパの支配下にあったが、1960年フランス植民地から独立した。住民は先祖がインド洋を超えてインドネシアからやってきたことを誇りにしており、マダガスカル島がアフリカに含められることを嫌がり、アフリカ並びにマダガスカルの並列を称している。

565. プロト・マレー系

マレー系民族のアジア大陸から島嶼への移動は何回か繰り返されており、民族毎にこの移住時期に差がある。比較的初期に移住してきた集団が「プロト(proto)マレー人」といわれ、比較的後期の移動の集団がデュトロ・マレー人(新マレー人)といわれる。プロトとは「最初の」、デュトロは「二番目」という意味である。ただし最近の学説ではプロト・マレー人、新マレー人という区分はあまり意味がないらしいが、文化の差異の説明にはきわめて好都合な区分である。

前者のプロト・マレー系といわれる民族はスマトラ島のバタック人(→607)、ガヨ族(→085)、ニアス島(→096)・ムンタウエイ島(→657)の島民、カリマンタン島のダヤク人(→624)、スラウエン島のトラジャ人(→618)等がその代表である。フィリピンのイフガオ族、ボントック族も同系である。

これに対して後者の移動時期が比較的新しい新(デュトロ)マレー人はジャワ人を始め、東南アジア島嶼部(インドネシア)の多数のマレー系民族である。

プロト・マレー系民族は共通して個性の強い。例えば首狩り(→625)のような独特の文化を持ち山中に居住していた。このためヒンドゥー教やイスラム教の外来の宗教の影響も受けずにアニミズムを維持してきた。伝統文化に固執してきたこれらの民族も最近では他民族との同化が目につくが、なおかつ特徴ある固有の文化を保持している。

私見であるが、この〈プロト・マレー人〉と〈新マレー人〉の関係は日本の〈縄文人〉と〈弥生人〉の関係にも対比できると思う。日本の歴史において縄文が先行し弥生が後継者である。しかしこの両者間の移行は突然に生じたのではなく両者は併存した。また両者は異なる民族集団によって担われたのものであり、地域的棲み分けもあった。しかし狭い日本では数において不利な縄文文化は弥生文化に次第に吸収される形で日本人が形成された。

縄文と弥生は文化としてどちらが優れているという問題ではない。出土された縄文土器には芸術的にも優れており縄文文化の方が個性は強い。縄文のオドロオドロシイ土偶を見ているとダヤク人やニアス人の木彫りと心象的に重なる。

東南アジアの島嶼においては低い人口密度から〈プロト・マレー(縄文)人〉と〈新マレー(弥生)人〉の併存の状態がそのまま継続することが可能であり、今日に至ったといえるのではないか。さらに飛躍すると日本武士の首への執着は縄文文化の痕跡であり、日本の縄文は台湾の高砂族につながりそうに思う。残念ながら日本の縄文遺跡からは首狩りの存在を証明する遺物はまだ発見されていない。

今日のプロト・マレー人の居住地を見ると、彼らは後からきた新マレー人に追われて山中にいるように見え

る。しかし見方を変えるとプロト・マレー人が涼しくていい所を先取りしたので、後からきた新マレー人は条件の悪い海岸に居住せざるをえなかったともいえる。

566. 先住民族

ジャワ島にいたホモ・エレクトス(直立原人)であるジャワ原人(→138)は絶滅し、地球上にはホモ・サピエンスが取って代わり、「ソロ(Solo)人」、「ワジャク(Wajaks)人」が大陸から海水面の下がったスンダランド(→016)にやってきた。

東部ジャワのパチタン(Pacitan)で発見された旧石器文化がその遺物である。スラウェシ島のトアラ石器文化(→205)、東部ジャワのサンブン骨器文化は後期石器時代のものである。先史時代の人類の痕跡が熱帯に多い理由は氷河期の気候に耐え得る地域であったからである。

その後、海水面が4～5万年前に下がった際にオーストラリア原住民のアボリジニの集団がインドネシア経由でオーストラリアに移住したと考えられる。オーストラリアのアボリジニとパプア系民族(→626)は近い関係にあるといわれる。

ところで東南アジア島嶼部の山中に点々と「ネグリティ(Negrito)」といわれる部族がポケット状に残されている。身長は低く、皮膚の色は暗褐色か黒色、短頭型、毛髪は縮れ毛というように身体的特徴はネグロイドである。ネグリティはスペイン語で「小黒人」の意味でアフリカの黒人、パプア人との共通性が見られる。言語的にはオーストロ・アジア系の要素が強い。

マレー半島の山岳部に居住するネグリティは2千名程度で吹き矢(→625)を使用する狩猟民である。その他にインド洋のアンダマン島の民族、フィリピンのアエタ族がいる。

一時アチェ州(→085)の険しい山岳に小人が原始的な状態で生息している伝えられたことがある。もし本当であれば原形に近い先住民であるが、その後の消息はない。マルク諸島の未踏の山中にもネグリティ族が放浪していると伝えられる。スマトラ島のジャングルの中の未開のクブ族(→656)はネグリティ族の血をひくらしい。

スマトラ中央部の「サカイ(Sakai)族」は短身体で頭髪は縮れ毛である。容貌からもネグリティとモンゴロイドの混血らしい。言語はオーストロネシアの要素が強い。サカイとはマレー語の奴隷の意味なので最近では使われない。マレー半島の「セノイ(Senoi)族」³と共通点が多い。

サカイ族はリアウ州のジャングルで焼畑農業を営み、簡単な住居で放浪生活に近かった。一般住民との接触を避けていたが、近年の石油開発によってリアウ州ブンカリス県に道路が通じたことから生活基盤が変わり、サカイ族が定住化するようになった。現実には彼らが都会に出てくるとインドネシア人とほとんど見分けがつかないらしい。名目はイスラム教徒やキリスト教徒に改宗したが、先祖伝来のアニミズムの影響が強い。

ネグリティはマレー系民族が東南アジアの島嶼部に大挙して移動して来る以前にいた東南アジア古代人の生き残りらしい。オーストラリアへの移動過程で残留したアボリジニの一派ということでもないらしい。東アジアのモンゴロイドの海の中でなぜこのように種族が存在するのか解明されていない。

³ <編者註>マレーシアでもこのアボリジニを orang asli = 原住民と呼んでいる。

567. 身体的特徴

世界の人種は皮膚の色に基づいて〈コーカソイドという白色人種〉、〈モンゴロイドという黄色人種〉、〈ネグロイドという黒色人種〉に大別される。かつては《褐色人種》という範疇があり、マレー系民族は褐色人種と称せられた。またアメリカ大陸原住民のインディアンを《赤色人種》という分類も存在した。

最近では褐色人種も赤色人種も黄色人種の分派とされ、インドネシア人は黄色人種の南方モンゴロイドに分類される。インドネシア人の赤ん坊の尻には日本人と同じ黄色人種の証の“蒙古斑”^{あかし}がある。

日本人より色の白いインドネシア人もいるし、インドネシア人より色の黒い日本人もいるが、一般的にインドネシア人の方が色は黒い。しかしこれは後天的なものらしい。産まれたばかりのインドネシアの赤ん坊の肌の色は日本人と変わらない。

インドネシア人など南方系モンゴロイドは目が丸く二重瞼が多い。北方系モンゴロイドは目が細く切れ長である。寒冷期に気候に対応するため目が細くなったのが遺伝体質になった。鼻が低いのも熱の拡散防止のためである。

日本人は大陸(朝鮮)経由の北方モンゴロイド系、南方系のハイブリッドである。目が細く切れ長の大陸系の人もある。目が丸く二重瞼の人は南方系の人もある。インドネシア美人、特にスダ美人(→612)の写真を見ると沖縄美人かと思う。

田口重久氏⁴の観察によればジャカルタで普通見かけるインドネシア人は、中・東部ジャワ州出身のジャワ人、西部ジャワ州出身のスダ人が多く、次に北スマトラ州出身のバタック人や西スマトラ州のミナンカバウ人などである。

インドネシア人の身体では同一民族の中での個体差の方が、民族間の相違よりも大きい。一概に言って、ジャワ人には丸顔で色が黒く、スダ人にはあごがしゃくれている肌の色の薄い人が目立つ。バタック人には日本人のように頬骨の高い人が多く、いかつい感じを受ける。ミナンカバウ人は少しアラブの血が混じっているように見える。

体躯の大きい人も小さい人もいるが、インドネシア人の平均的体躯は日本人より小さい。現在のユドヨノ大統領はインドネシア人では例外的に大きい。同一種の哺乳類は暖かい所ほど身体が小さいことは虎や熊の例と同様に人間にも適用できるベルクマンの法則(→067)である。ただし人間の場合は食料事情の影響も大きいと思われる。

マレー系民族の中でも曙関や小錦関のようにポリネシア系は概して大柄である。島嶼では一般に食料事情が悪いにもかかわらず身体が大きい理由は食糧の入手ができない時に備えて体内にエネルギーを蓄積するためということであるが??。インドネシア人にポリネシア系を思わせる大柄の人もある。

警察・軍隊が治安用に使用している銃は輸入品のため、普通のインドネシア人にとって銃は大きすぎる。警察が治安のためとは言いながらやたらと銃をぶっ放す傾向があるのは輸入の銃が身に合わないからだという説を紹介しておく。

⁴ 〈編者註〉編者のことである。

568. 双系社会

婚姻と出生を契機とする親族といわれる人間関係のあり方は民族によって多様多岐である。インドネシアの民族ではスマトラ島のバタック人(→607)は〈父系社会〉である。父系(男系)社会は世界でも最も一般的なシステムで日本人社会も原則として父系社会である。

同じスマトラ島のミナンカバウ人(→609)は〈母系社会〉である。特に母系(女系)社会は世界にも数少ない貴重な存在である。ミナンカバウ人でも王位継承は父系というように社会階層で変わるが、この場合でも祭儀は母系でおこなう。ミナン人に隣接するルジャン族のようにミナン人の影響をうけて 1930 年頃より父系から母系に変更になった民族もいる。

ジャワ人をはじめインドネシアの多くの民族は父系・母系のどちらでもない〈双系社会〉である。双系社会では結婚すればその夫婦は夫方、妻方の何れにも属しない。仮にどちらかの親の家に同居または隣に住むことがあってもケースバイケースで社会一般のルールがあるわけではない。

家系というコンセプトがないからインドネシア人には苗字、即ち家族名⁵がない。世代間の連続観念が希薄である。直系、傍系という考え方もない。

しかしワヤン(→904)の登場人物を見ると人物の血族の説明がうるさいくらいである。家系はなくても血統は重んじられる。血統には母方の方も並列的であり対等である。日本の系図を見ていると家系があって男の名前だけが連ねてある。しかし日本の父系社会は儒教によって確立された後天的なものであり、実態はかなりの母系的要素が潜在⁶している。

子供の割礼、結婚式、葬儀、その後の儀式に一族が集まることもあるが、そのリーダーとなるのは知識が豊富とか社交的などの個人の素質であり系譜や出自ではない。

インドネシア語の家族「クルアルガ」(→573)は狭い意味の家族だけでなく親族をも含む。双系社会の親類は父方、母方の両方に対して等距離である。インドネシア人には親類が多い。親類とは何らかの血縁関係の知り合いは全部親類である。

「ソウダラ(saudara)」は狭義には兄弟姉妹という意味であるが、広義には親類全般を指す。スカルノ大統領が演説の冒頭で『ソウダラ・ソウダラ』と呼びかけた。「同士諸君」という意味にもなる。「ブサン(besan)」の語義は従兄弟の意味である。インドネシアでのブサンの使われ方は血統上の従兄弟に限らない。政治家は党派を超えても親しい関係にあれば皆ブサンと呼びかける。

インドネシアの王朝史には女王が存在している。マジヤパヒトの創設者(→247)の後 3 代は女王である。アチェ王国(→257)ではイスラム改宗後であるが、イスカンダル・ムダ王の後には女王である。国王には職能分担から男が選ばれたが、男がいない場合は女王が選ばれた。血統が優先である。ヒンドゥー教・イスラム教のどちらの教義にもない女王の存在はマレー系社会の所産であろう。

⇒610.(ミナン人の母系社会)

⁵ 〈編者註〉バタック人など外島の種族には名字を持つ部族もいる。

⁶ 日本では明治時代に民法策定の際に武家社会の父系原理を持ち込んだものである。江戸時代の民衆は双系社会の要素が強かった。

569. 女性上位社会

インドネシアの大半は双系社会であるが、男女対等が常に明確な状態で確認できるわけではない。カルテイニ(→342)を憤らせたようにジャワ貴族社会では男尊女卑の慣習が定着していた。これは女性の地位が低いヒンドゥー教とイスラム教の影響である。

しかし男女平等の西欧近代思想が抵抗なく受け入れられたのは双系社会(前項)の基盤故であろう。インドネシアでは双系社会であることから父系社会と比べると女性の社会的地位は高い。2001年に女性のメガワティ大統領が登場した。

近代社会の仕組みの中にも女性の職場進出は日本以上である。日本を上回る女性の管理職がいるのが一般的な事務所の風景である。インドネシアでは女性が大臣になってもニュース価値はない。

日常風景においても女性連の横行が目立つ。例えば夫のビジネスのパーティでも夫婦同伴で押しかけて憶することなく中央に堂々と鎮座しており、亭主連は隅の方である。巷では「イブ・ノモール・サト(妻がNO.1)」という。インドネシアの離婚率がアメリカ並に高いのは女性が忍従する文化(イスラム教)が皮相的だからである。

女性の社会進出は日本はおろか西欧よりも西欧化されている。インドネシアで会社経営に関わった駐在員から内緒で聞いた話であるが、インドネシア人の男性部長より女性秘書の方が役にたつそうである。この意見に同意する人が多いことから女性の方がしっかりしているというのは公然の事実である。

庶民の商売も男性の場合はどこかなげやりなところがあるのに対して女性の方が熱心である。食料の確保も〈澱粉は女性〉〈蛋白質は男性〉と大雑把な分担になっており、日常は澱粉だけで事足りる。要は経済的実力において対等ということになる。

問題は女性が働かなくても十分に生活できる上流社会の女性である。官庁、団体においてはゴトン・ロヨン(→593)に基づく互助組織があるが、そのトップはトップの夫人であり亭主の位に応じた婦人会(ダルマ・ワニタ)組織⁷ができていく。ちなみに公務員のダルマ・ワニタはスハルト時代のゴルカル(→393)の選挙時の有力な集票組織であった。

ダルマ・ワニタの会長は単なる名誉職ではなく実際に活動をする。亭主の活動が〈表〉とすると、夫人の組織は〈裏〉である。そのうち夫人が出しゃばってくると表裏が解らなくなる。インドネシアについては汚職とかファミリー・ビジネスという芳しくない評判があるのは女性が強すぎることにその一因がある。

PKK(→732)という生活改善運動がRW、RTという隣組組織(→597)と一体となった婦人会として盛んに活動している。

スカルノ大統領は複数の夫人がおり、各夫人が各々の代理業務で大統領に圧力をかけたため内部崩壊をおこしたともいえる。スハルト大統領の失墜の原因のファミリー・ビジネスは元をたどるとティエン夫人(→451)に行きつく。フィリピンのイメルダ夫人もマレー系社会の共通する社会現象である。

570. 姓のない名前

インドネシア人の名前の特徴は家族名にあたる姓がないことである。世界で“姓”のない名前はビルマ、マ

⁷ ダルマ・ワニタは隣組と同じく日本軍政中の婦人会に起源がある。

レーシア、ラオス、パキスタンにも見られる。インドネシア文学に植民地時代の学校でオランダ人がインドネシア人に「家族の名前もない連中！！」と嘲ける場面があり、インドネシア人の子供はその屈辱に耐えた。インドネシアの場合、姓がなくて名前だけであることは双系社会(前々項)であることと密接な関係にある。不特定の祖先という概念はあっても家系という概念がないから姓の必要性がない。

名前の付け方は新しく導入される要素もあるが通常は頑^{かたく}なに民族の伝統を維持している。従って人の出自民族は名前からもおおよその見当はつく。

父系社会のバタック人(→607)では個人名＋氏族名である。シレガル(Siregar)、シラエン(Silaen)、シナガ(Sinaga)はトバ・バタック族であり、ルビス(Lubis)、ナスティオン(Nasution)はマンダイリン・バタック族の代表的な氏族名である。その他に Simatupang、Silitonga、Pangabea、Hutapea、Simanjuntak、Hutasoit、Sembiring、Tobing がある。

キリスト教への改宗の早かったミナハサ(マナド)人(→620)の名前は従来の個人の名に新たに苗字が付け加わっている。

ミナンカバウ人(→609)の名前はタヒルが代表的である⁸。その他では Herliza、Faizal、Rizal、Gozali、Amizal のように「z」の文字を含む。

スンダ人に多い名前は Suhanda、Suhanya、Juanda などである。姓に相当する名は Nataatmaja、Tirtakusuma、Kusumaatmaja というように「a」で終わる。

アンディといえはブギス人である。

バリ人の名前(→648)のつけ方には男女を問わず順番につけるのが特徴である。称号からカーストが推測できる。ジャワ人の名前は別項(→639)を設けている。

民族を問わず熱心なイスラム教徒は聖教者の名にちなむ。「フセイン(Hussein)」はイラク大統領に限らず北アフリカからインドネシアにまで見られる名である。「アリ(Ali)」とか「アブドゥラ(Abdulla)」のようにイスラム教にちなむ名前になると全民族共通である。アラブ人やペルシア人、モロッコ人との区別もできなくなる。

華人(中国系インドネシア人)の場合、スハルト体制において同化政策(→679)の一環としてインドネシア風の改名を強制された。改名後の名前には例えば「林(lin)」が Salim になるように中国名の痕跡をとどめているものが多い。その他には呉(go)は sudargo、王(wang)は guwan などである。

日本人の名前には姓が先にある。しかし外国人に名乗る際には個人名と家族名の順序を入れ替えているのが習慣になっている。中国人、朝鮮人は外国でも姓と名の順に名乗る。そのうち日本の粗^{あら}さがしに執念を燃やす隣国のさがない連中は「日本人は欧米人に擦り寄るために姓名をひっくり返した連中」と声高に軽蔑するようになるだろう。今変更は効かないだろうが残念な習慣である。

571. インドネシアの二面性

インドネシアは多様な国である。この多様な国を一概にいうことは難しいというよりは、むしろ不可能であろう。従ってこの多様な国については二面性があるという視点で見れば理解しやすいと思う。

二面性があるということは実際にはどちらかの要素がより強く表われるということで歴史、民族、状況によってその程度に差が生じる。

⁸ <編者註>ミナンカバウ人はアラビア語の名前を付けることが多い。

インドネシアは海に囲まれた島国である。この状況においてもなお《海洋国》としての一面と《内陸国》としての一面との両面性がある。

例えばジャワ島は海に囲まれていてもジャワ人は海への関心は低い。沿岸漁業も熱心でない。一方、スラウェシ島を本拠とするブギス人(→617)は海洋民族である。その活動範囲はオーストラリアから東シナ海、さらには沖縄まで及んでいた。また、インドネシアにはバジャウ族(→662)という海をねぐらにしている漂海民がいる。

ジャワ島が稲作による《農耕社会》であるのに対してスマトラ島ではマラッカ海峡の地の利を活かした《商業社会》が発達した。いうまでもなく前者は〈定着型〉であり、後者は〈移動型〉である。

ジャワ人をはじめとするインドネシア人はおおよそ商業に不向きであり、ここに華僑が進出するスキがあった。これに対して同じインドネシア人でもミナンカバウ人(→609)は華僑に劣らない商業民族である。

歴史的に見てもジャワ島の歴代の王朝は《土地支配》による農民からの租税を基盤としていた。一方、スマトラ島のような外島の王朝は《通商支配》に基づく物品税であり自ら交易を行い商業利益をえた。

ジャワ内陸の王朝では王の条件として血統、世襲が重んじられ、そこでは洗練された礼儀作法が発達した。海峡の交通の要衝の地の王朝では王の人望が重要な要素であった。そこへは世界各地からの商人が訪れ、冒険進取の気風が生じた。もちろん時には海賊行為もあった。

以上を要約すると《ジャワ型》と《外島型》というように類型化される。個々のケースでは、例えばマジャパヒト王朝(→248)のようにジャワ島王権であっても外島型があるし、その逆も当然ありうる。今後ともインドネシアにおいてはこの二面性の中で人口の多いジャワが一応の優位を保ちながらジャワ型と外島型のバランスの中でどちらかが濃くなったり薄くなったりしながら社会は発展していくであろう。

日本では織田信長の楽市楽座政策によって商業社会が発達し、豊臣秀吉時代には海外貿易も発達した。織豊時代には通商が重視されたが、その後、徳川政権によって鎖国政策の下に通商は政権の玩弄物となり長崎に閉じ込められ芽を阻まれた。日本は未だ徳川による 100%農業社会の後遺症を脱しきれないのでなかろうか。